まとめ

「言語」の統合と分離

赤いゲル（遊牧地域において識字教育や衛生面での啓蒙を行う移動式の「赤い部屋」であった）

まとめ　「言語」の統合と分離

以上、６章にわたって、モンゴル諸族の言語政策とその諸相を検討してきた。

それまで、モンゴル文語という一つの文章語で意志の疎通ができていた頃の曖昧模糊とした「言語」という概念が、最終的にはモンゴル語、ブリヤート語、カルムイク語という独立した３つの「言語」に回収していく過程を見たわけだが、そこには次のような動きが存在したように思える。

１）モンゴル全体を統合する動きと、各地域へと分離していく動き

２）ブリヤート、カルムイク、モンゴル人民共和国諸地域におけるそれぞれの内部での統合と分離の動き

統合する動きは、近代的な意味での民族としての定義がまだ曖昧であったモンゴルという全体を、一つの文章語を堅持することによって、まとまりを維持していこうという動きであった。近代化の議論が早くから行われたブリヤートでは、近代化と言語の問題が議論され始め、ワギンダラ文字のようなモンゴル文字を修正したものや、ラテン文字で母語を書こうとする試みがあった。しかし、それらの文字はあくまで基礎の段階を修得する目的のものであり、次の段階でモンゴル文字を修得し、モンゴル文字で読み書きするためのものであった。他のモンゴル世界との関係を断ち切らずに保持しつつ、人々を啓蒙するための文字だったのである。ブリヤートだけでなく、大きなモンゴル世界の統合を構想したブリヤート人は、ブリヤートでの活動と同時に、第五章で見たとおりモンゴルに招かれ、自治政府や、人民共和国の近代化計画にも積極的に参加し、リードを取っていった。ラテン文字化が始まり、ブリヤートはモンゴルとともにハルハ方言をその文章語の基礎とすることを決めた。そして、さらにそのような統合の動きにカルムイクをも取り込もうとしたのが、1931 年１月モスクワで行われたモンゴル諸族言語・文字問題会議であったのである。

カルムイクは 1924 年からキリル文字を採用しており、独自の道を歩んでいた。ラテン文字化期、社会主義の時代に育った世代が、運動の主導的立場に立った。彼らは、1931 年に行われたモスクワでの会議に反発し、それまでの原則をほとんど変えなかった。現在に至っても原則は変わらないままである。

すでにここで統合の動きの一部は挫折するが、ブリヤートやモンゴルにおいても、方針の変更がなされてゆく。

1931 年６月、ハルハ方言の採用は第三回共産党ブリヤート・モンゴル地方委員会幹部会で、「王侯貴族の絶滅した言葉をブリヤートに広めようとする汎モンゴル主義」と批判された。幹部会は文章語を形成する際には「ブリヤート・モンゴル労働者の生きた話し言葉から」離れてはならないとし「何よりも、ハルハ人民のことばに一番近いセレンゲ方言」

に基づいたものにすべきであると決定したのである。

モンゴルにおいては、1932 年 11 月、国家小委員会の代表者と閣僚の合同協議会が、労働者たちの識字活動はモンゴル文字で実行するが、ラテン文字に徐々に移行するための準備を行い、文字を教える基礎となる教科書を早急に出版することを決定するが、実質この決定はラテン文字の実施を棚上げするものであった。

モンゴルでの活動が下火になる中、ブリヤートにおいては、なおもラテン文字化がつづけられていく。しかし、モンゴル語に近いという理由で採用されたセレンゲ方言は、ブリヤートの人口の 10%にしか話されておらず、さらに、首都近郊の中心的な方言であるホリ方言との差があったために次第に批判の声が高まってゆく。その声が 1936 年に行われた言語学会議によって、セレンゲ方言からホリ方言へと文章語のもととなる方言が変わるきっかけとなった。こうしてブリヤートは自らもモンゴルと距離を置くこととなった。

一方のモンゴルも、それまで影響力のあったブリヤート人たちの大部分が標的となった大粛清期以降、再びラテン文字を見直す動きが始まる。が、ブリヤートとの協調は話題に上ることはなかったようである。

こうして、統合を志向する動きは解体され、分離した諸地域の言語が残った。

この時代に生き、ラテン文字化運動の最初期の 1931 年に亡くなったウラジーミルツォフは、革命後のモンゴルにおいて、口語に文語の影響を認め、その「革命的変化」を書き残そうとした。かれは、このような口語と文語の融合によって、それまで大きな差異があったモンゴル文語と諸地域の方言の差異が、埋まるだろうと考えていたようである。実際、そのような動きは、モンゴル文字を使っていた時代のブリヤートでも観察されていたのである。

よってかれにとってモンゴル諸族全てで始まるラテン文字化も、その前に始まっていたカルムイクにおける最初のキリル文字化もあまり好ましいものではなかった。というのも、これらの運動は文章語によって統合されていた「彼らの言語自体の大きな変化をも意味する」ものであり、その変化とはそれぞれの言語の分離を意味したからである。

1928 年、最初のキリル文字化の議論が紛糾していたカルムイクにのりこんで、アラビア語を例にとって、広い範囲でコミュニケートできることの重要性を述べたのも、そうした危険性を伝えたかったからかもしれない。明確なことばではなかったが、暗示するような形で彼は死ぬ寸前まで様々な論文で、変化の意味を警告しつづけた。

しかし、現実は彼の望む方向へは向かなかった。

一方、ブリヤート、カルムイク、モンゴル人民共和国の諸地域内部でも統合と分離の動きが存在した。

ブリヤートにおいて、最大の問題となったのは、東西ブリヤートの問題である。

もともと、ブリヤートは一つの集合体として意識されていたというわけではない。1822年のスペランスキーの改革により、ブリヤート人たちの自治が認められ、「草原議会」という自治政府を成立させたが、これは支族をもとにしており、ブリヤート全体が一つの行政機関を持つものではなかった。また、19 世紀になって年代記がさかんに書かれることになったが、これも各支族毎のものであり、ブリヤート全体をまとめたものはなかったのである。統一の意識を持つのは、民族意識に目覚め、バイカル湖の東西にブリヤートと名付けられた人々がいることを、ブリヤート人の知識人たち自身が理解し始めてからのことだろうと思われる。しかし、それはモンゴルというもっと大きなコンテキストの一部としての理解であった。

宗教的に見ると東部は仏教の影響を受けたものの、西部では仏教の布教が禁止されたため、それほど影響を受けることはなかった。そのため、仏教とともに広まっていったモンゴル文字も西部全域に広まらなかった。また、仏教語彙が転用され、社会の多岐にわたる用語があらかた準備されていた東部と、ロシア語の影響の強い西部では、語彙的にも非常に大きな差異が生じた。

革命以降、西部はそれほど、自分たちの言語に重きを置かず、ロシア語を重視し、さらに、自分たちの言語を書き表す文字にも意見に違いが生じていた。

ラテン文字化当初はハルハ方言を書き言葉の標準とし、ブリヤートの方言的要素を蔑視し、直そうとしたのである。

1931 年に西ブリヤートで行われた言語学会議では、西ブリヤートの方言で書かれた本などを作成すべきという提案がなされている。しかし実現することはなかった。

その後、書き言葉のための方言がセレンゲ方言に変わっても、それほど、西ブリヤートとの差は埋まらなかった。1936 年にホリ方言が採用されると、方言差はかなり解消されたと思われるが、それでも、ホリ方言と西のブリヤート諸方言の間には、語彙的にも文法的にも埋まらない差異が多く存在した。1937 年には西部地域がイルクーツク州に併合され、行政区画としては分離することになった。しかし、言語に関しては様々な議論はあっても東西に分離することはなかった。

カルムイク人たちはロシア帝政時代には大きく三つの地域に別れて住んでいた。南部のドゥルベト人たちはスタブロポリ州に、東部のトルゴト人たちはアストラハン州に、そして、西部のブザウ人たちは、ドン河流域にコサックと一緒に住んでいた。革命への協力によりソヴィエト政府からカルムイク人の自治が認められた後、自治の方向性をめぐって話し合いがもたれた 1920 年 6 月の会議に参加したアマルサナンは 1924 年に出版した自伝的小説『ムドレシキン・シン』のなかで「カルムイク人自身の何世紀もの歴史において、ウルスや支族同士の偏見を乗り越えて、貧しい普通の人々が集まったのはこれが最初である。これが最初だったのである」とのべている[Амур-Санан(1987), 171]。すでに 18 世紀の終わりにカルムイク・ハーン国が解消され三つの地域に分けられて、その管理下におかれるよ

うになってから長い年月が過ぎていたのである。

この時期においては、カルムイクと総称でよばれているが、それぞれは別の意識を持ち分裂の危険もあったといわれる。原因の一つは内部紛争であるが、もう一つはロシア人からの干渉であった。カルムイク文学を専門とするカルムイク大学カルムイク語科副学科長ビチェーエフ氏によれば、先ほど紹介した『ムドレシキン・シン』にはそうしたロシア人達の干渉をさけ、夜、会議場となった場所を出て草原で、カルムイクの代表団が自治を語り合う場面があったという。再版されるたびに、その時の共産党の方針によって内容が変わっていったため、この本の最新版である1987年版には、そのような事実は書かれていない。小説という形式を取っているため、全てを事実とすることはできないかも知れないが、議事録にも載っていないこの出来事が、もし事実とすれば、この会議においてカルムイク人同士の分裂をさけ、ロシア人達の干渉を排し、カルムイク自治共和国が成立したことになる。

しかし、最初のキリル文字化の時代から、どのようにしてカルムイク語を書いていくかに関しては、カルムイク人同士で意見が合わなかった。1931 年にモスクワでは一度トルゴト方言と決められたが、同年のエリスタでの会議では他の方言要素も重視することになり、1934 年に行った言語学会議では、トルゴト方言を基礎とするということばさえ聞かれなくなっていくのである。

方言差の問題で争うことを避けるためとられた措置が講じられなかったわけではなかった。正書法において、第二音節以降の弱化母音を書かないのもその一つだといわれている。また、語彙においては、基礎語彙においてもトルゴト、ドゥルベトの両方言が並存する形で存在しているのもその一つである。[i]

統合というには緩やかであるが、両方のバリエーションがほぼカルムイク語の文章語として認められたのである。

モンゴルについてはどうだろうか。

モンゴルは辛亥革命において内モンゴルと領域的に統合する可能性を有していた。一時期、内モンゴルも支配下に修めるが結局撤退せざるを得ず、その試みは失敗に終わる。1921 年のモンゴル革命時期にも様々な危機に直面したが、外モンゴルとよばれた地域はモンゴル人民共和国として独立を果たした。

モンゴルには、ブリヤート、カルムイク以上に様々な方言が存在しているが、ハルハ方言の優位性は当初から揺るぎのないものであったようである。むしろ、モンゴル文字による文章語とハルハ方言を基礎とした新しい文章語を作る人々との対立があったと考えられる。1932 年にモンゴル文字による文章語を支持していた当時の科学委員会委員長のアマルが、ブリヤートのことばに適応させて作ったラテン文字の正書法をイシドルジがハルハ方言に無理に使っていると非難しているように、当初において、新しい文章語はブリヤート人が中心となって推進するものであった。しかし、大粛清により保守派もブリヤート人た

ちもその多くが排除され、新しいラテン文字化が考えられた時には、もう対立は解消されていたようである。

モンゴルの場合は、方言差による内部の分裂を抑えての統合というよりは、むしろ、過去にあるとみなされたもの（モンゴル文字の文章語）と外にあるとみなされたもの（ブリヤート人）を排除することによって統合を完成させたというべきなのだろうか。

こうして、三地域それぞれに地域内での言語の統合を完成させる。

以上、検討した事実から、お互い似通った言語において、「言語」が成立する過程において言語自体の本質的相違が必然的に言語を生み出しているのではなく、政治的な方針によって言語の外部にあるもの排除し、内部の多様性を抑えることによって成立したという結論に達する。

また、初期のブリヤートにおけるラテン文字化のように標準語を外部から持ってくることは難しいことであった。特に国境がある場合には、国外にある民族との統合や、今ある国家からの分離への猜疑心をもたれてしまうのである。ルーマニア語とモルドヴァ語がほぼ同じ言語であり、国境と文字だけが二つを分かつものであるということはよく知られている事実であるが、ブリヤート語においても、モンゴル語とほぼ同じ言語になる可能性があったにもかかわらず、別の言語になったのはこの二つの集団の間に国境があったことが大きかったのである。

逆に、隣接していない遠く離れた場所との統合はさらに難しいようである。他のモンゴル人の住む場所からかなり隔たった場所にあったがカルムイクはモンゴルと交流が全くないいわけではなかった。モンゴル革命に本研究にも出てきたカヌコフやノミンハーノフが参加していることは、彼らが自分たちのモンゴル性を意識していることのあらわれといえよう。反対に、モンゴルの人々も集団化の時代に飢餓状態になったカルムイクの人々に対して、食料援助を行っている。また、カルムイクの人々は新疆に住む同胞へも同じように関心を寄せていた。1926 年に創刊された新聞『オラーン・ハリマク』（革命初期のものとは別物）は、毎号のように中国の状況をトップ記事として掲載しており、また 1924 年の公文書資料には、新疆から来たカルムイクに来た同胞がレニングラードの現代東洋語大学で学べるように請願する文章が残っているのである[P112/1/33/35]。しかし、言語に関しては、文明を取り入れるためにキリル文字化をしなければいけないと考えていた。こうして踏み出された最初のキリル文字化の時期に様々な議論が戦わされ、ようやく落ち着くかというところにラテン文字化運動が始まる。ラテン文字化期の 1931 年にモスクワで開かれた会議でのモンゴル諸語の統合を意図するような会議の決定は、以前あった議論を再度、同じことを蒸し返すように見えただろうし、また、場合によっては言語政策の主導権を他に渡しかねないものと受け取られ、カルムイク人たちは、決定に反対するような行動をとった。

以上であげられたような事実は、言語が「造成」されるきっかけとして、ほぼ全て知られたものであり、新しい事実の発見とはいえない。ただ、そのような事実が、モンゴル諸族における「言語」の成立の過程を通じても見いだされているということをここで述べておきたいと思う。

1920 年代から 1940 年代までのモンゴル、ブリヤート、カルムイクの 3 地域においては、「言語」や「民族」の形成において様々な可能性が存在した時期であった。

強調したいのは、近代になって成立する「民族」は必然の結果として成立したのではなく、可能性の中から意志と意志のせめぎ合いの中で残った一つの結果から成立したのだということなのである。

現在においてはそれぞれがブリヤート語、カルムイク語、モンゴル語という「言語」をもつ「民族」となった。しかし、こう言ったからといって、現在選ばれた選択肢が幻想であるとか、間違っているとか主張するわけではない。実際、その定義のもとで人間が生活しているかぎり、それは実体として機能するのである。ただし、それは真実としてそこにあるものではなく、政治的な運動で変わる可能性もあるのである。ここに提示されたのは、さまざまな可能性から選ばれたひとつのものとして、それぞれの民族が定義される前の自己規定を、言語に関する議論を通して検討したものなのである。

また、以上で、検討した資料は全て知識人たちの言説や政治的な決定からのものであり、民衆が自分をその当時どう規定していたかを表していないことには注意していただきたい。おそらくは、このような知識人たちの議論の結果を契機に、学校での教育や、文章語の存在や、文化的な品々の陳列などによって自分の目に見える形で「民族」が提示されることから、曖昧模糊としていた自己規定の一ヴァリアントであったはず「民族」の概念がブリヤート、カルムイク、あるいはモンゴルというイコールで結ばれ、大衆化したと考えられる。

過去に人々がどう考えていたかを提示し、多様、多重であった人々の自己規定が、ここで検討されたモンゴル諸族のもとではどのようにまとまったかを考察すること、過去に起こらなかった可能性を記述し残すことが、筆者が本論にて意図したことである。

上記の考察がその目的を果たしたと考えていただけるなら幸いである。

H15/10/25 初稿　H22/05/03 字句修正

---

[i] しかし、аав ということばに父と祖父、ээж ということばに母と祖母の意味があるために理解に障害が生じるという場合もある。